外国語

研究主題

目標に向かって，主体的に学び，表現する児童の育成
～相手意識と振り返りの検証から～

新潟市立松野尾小学校
牧口 倫也（平成 27 年度）

主張（目指す児童の姿）

近年，生成 AI の普及や翻訳デバイスの日常化に伴い，外国語を学ぶ本質的意義が改めて問われている。文部科学省の外国語ワーキンググループ（2026 年 8 月 3 日開催）の議論では，外国語を学ぶ本質的意義，すなわち【学びに向かう力，人間性等】を核とした「言葉，文化，コミュニケーションへの深い理解を育むこと」や「自分の考えが磨かれて思考が深まるとともに，人間関係が豊かになること」と整理されている。

また，その具現に向けては，児童が基礎となる【知識及び技能】を「***統合的な理解***」として蓄え，それを【思考力・判断力・表現力等】として「***総合的な発揮***」へと高める「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりが必要不可欠であるとされている。

これらを踏まえ，本研究では【学びに向かう力，人間性等】の育成を軸に据え，**『目標に向かって，主体的に学び，表現する児童』の育成**を目指す。

具体的な児童の姿

1　主体的・対話的で深い学びの姿（具体的な姿）

【知識及び技能】***の統合的な理解***

英語の特徴やきまりに関する知識を，コミュニケーションの中で組み合わせて使うことにより，②英語による理解や表現の質が高まることを理解している。

【思考力，判断力，表現力等】を高めた***総合的な発揮***

コミュニケーションを行う①目的や場面，状況などに応じて，様々な話題について，相手の考えなどを受け止めながら， 情報や自分の考えなどを整理し，③表現等を工夫して伝え合うことができる。

2　目指す児童の姿

【学びに向かう力，人間性等】（検証の姿）

外国語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち，他者との対話・協働を通して考えを広げたりするとともに，**Ⓐ自らの学習を調整して，Ⓑ他者との相互理解を図ろうとする**態度を養う。

1　研究主題設定の理由

（1）児童の実態と課題

6 年生令和 7 年度 12 人，令和 8 年度 16 人。言われたことは，非常に一生懸命に取り組む。しかし，やることを与えられなければ何をしてよいかわからず，自ら主体的に活動することがあまりない。児童に実施した外国語に関するアンケートでは，「1. ねばり強く学習に取り組んでいる」では，肯定的評価が 91.7%。「2. Ⓐ自分の学習を振り返り，よりよくなるために工夫して学習している」では，肯定的評価が 75%。「3. Ⓑ外国語を使ってもっと話をしてみたい」では，肯定的評価が 75%であった。特に，**2 と 3 の評価が低く**，自分から主体的に学習に取り組んでいき，自分の課題に気付き，様々な方法で確かめ，改善し，自信をもって外国語でコミュニケーションを図ることに困難を感じている児童が多い実態がみられた。また，普段の授業における児童の様子から，「すらすら話せた」「間違えずに言えた」など，英語を話せた，覚えたことを言えた等，自分の英語が言えたかどうか終始する姿が多くみられた。

これらのことから，③自分の学びを自覚し，よりよくしようとする意欲が低い。②課題解決や目標達成のために取り組む方法が分からない。①何のために英語を使い，伝えるのか目的が明確でない等の児童の課題が見えてきた。

（２）研究仮設

①単元デザインを工夫し，②学習環境を多様にしながら，③学んだことについて視点をもって振り返らせることで，児童が目標に向かって，自分ごととしてⒷ目的・課題を捉え，Ⓐ自分に合った学習方法で取り組み，Ⓑ相手意識をもって，伝えることができるようになる。

（３）研究内容

課題を解決していくために，手立て①～③を組み合わせて指導する。

【手立て①】 児童が自分ごととして単元ゴールを作れるような，単元構成の工夫

教師提示の目的・課題ではなく，単元で必要な言語材料に慣れ親しませる中で，単元の目標となる対象の人，内容，伝え方を児童から引き出す。

【手立て②】 個別最適な学びを実現する学習環境の設定

単元ゴールに向けた資料作成，発表練習の場面で多くの選択肢を与える。聞く（友達，教師，ALT）まとめ方（ロイロノート，Canva）調べる（インターネット，ピクチャーディクショナリー，ロイロノートやGoogleでの音声出力）発表練習方法（動画で自撮り，直接見てもらう）場所（教室，パーテーション，放送室，特活室）といった選択肢を与えて，自分に合った学習方法を選んで学習に取り組める環境を作る。

【手立て③】 学びの自覚化を促す自己評価・他者評価のための振り返りカードやpoint check cardの工夫

毎時間，授業終盤に振り返りカードを記入させる。振り返りカードには，「学び方」「言語活動」「今日思ったこととその理由」「次にがんばりたいこと」の４点を記入させ，本時の学習について振り返らせる。また，単元ゴールに向けた資料作成場面と発表練習場面では，友達に聞いてもらう時に，具体的なアドバイスを送り合えるよう，よりよく相手に伝えるためのpoint check cardを使用する。

（４）研究方法

① 児童アンケートの量的検証ⒶⒷ

肯定的回答が低かった児童アンケート２Ⓐ・３Ⓑの項目を継続的に実施し，児童の変容を見取る。

② パフォーマンスによる質的検証Ⓑ

相手意識をもって伝えられているかパフォーマンスで質的検証をする。

２　研究の実際

今回の実践は，令和７年度２実践，令和８年度２実践を行い，同質集団での変化と，異質集団での変化から実践・検証を行った。

実践単元はNew Horizon Elementary Unit5「Where is it from?」，Unit７「My Best Memory」，Unit1「This is me!」,Unit4「Let’s see the world.」の４つで行った。

（１）手立てと児童の姿

【手立て①】 児童が自分ごととして単元ゴールを作れるような，単元構成の工夫

１～３時間目までに，コミュニケーションを支える活動を行った。自分で調べながら話したいことを，ペア，グループ，全体でやり取りをしたり発表したりして，新出表現や単語に慣れ親しんだ。新しい言語材料に十分慣れ親しんだ３時間目の終わりに，学んだ言語材料を基に，誰にどんなことを話したいか児童に聞き，「ALTや校長先生等（相手）に，自分の身近な○○についてクイズ発表や伝え合いをしたい。」と児童と共に単元のゴールを設定した。相手が明確になることで，内容面では，「自分のことを知ってもらいたいから，自分の○○をクイズにしたい」「相手に楽しんでもらえるように，こちらからも質問をしたい」といったことや，伝え方では，「家からお気に入りのものを持ってきて直接見せたい」「Canvaでまとめてスライドでも伝えたい」「発音をよく言えるように練習したい」など，高い意欲をもって学習に取り組む様子が見られた。

【手立て②】 個別最適な学びと協働的な学びの一体化を実現する学習環境の設定

内容を考える場面や，話したいことを考える場面では，教科書で既習事項を確認したり，ピクチャーディクショナリーやインターネット検索で調べたりしながら主体的に考えている姿が見られた。「自分の話したいこと」を優先してまだ習っていない表現も調べている児童もいたが，既習事項で表現できないか担任に聞きにくる児童も多かった。また，友達と相談している時に，ALT と校長先生に質問する内容のアドバイスをしたり，正しい文法を教えてもらったりしている様子が見られた。

発表練習の場面では，教室の移動黒板をパーテーションとして使ったり，特活室や放送室に移動して練習したりしていた。タブレットスタンドで自分が話している様子を撮影したり，友達に撮影してもらってアドバイスをもらったりしながらよりよい発表になるように繰り返し練習をしていた。

【手立て③】 自己評価他者評価のための振り返りカードや point check card の工夫

振り返りシートに「自分ができるようになったこととその理由」を振り返りに書かせたことにより，目標に対して自分がどれくらいできているかどうか，どんな学習をしたからできたのかを自覚することができるようになった児童が多かった。足りていないところを自覚し，家での自主学習で外国語の学習をしてくる児童も増えた。また，point check card を用いた友達に対する他者評価では，「興味が出る内容を取り入れたらいい」や「もう少しゆっくり話すとわかりやすい」といったアドバイスを受けて改善していく児童が多かった。

（2）検証

①「振り返り」の量的検証（児童アンケート）

単元終了後，単元初めと同様の内容で外国語に関するアンケートを行ったところ，肯定的評価の数値は以下の通りとなった。

	自分の学習を振り返り，よりよくなるために工夫して学習している	外国語を使ってもっと話をしてみたい
実践①	75　%　→　81.7%	75　%→　83.4%
実践②	75　%　→　100　%	75　%→　83.4%
実践③	86.7%　→　100　%	93.4%→ 100　%
実践④	80　%　→　85.7%	93.4%→ 100　%

②「相手意識」の質的検証

相手意識をもっているかのパフォーマンス数値化の基準を以下のように設定した。

（発表）	A：３点	B：２点	C：１点
相手に応じた内容・表現	相手にとって必要な内容を，学習した表現を使って分かりやすく伝えている	学習した表現を使って伝えている	内容や表現に不足があり，伝わりにくい
聞き手を意識した話し方	聞き手を見ながら，声の大きさや速さを工夫して話している	時々聞き手を見ながら話している	原稿を見ることが多く，聞き手を意識した話し方が十分ではない
聞き手に伝える工夫	表現やジェスチャー，間などを工夫し，伝わるように話している	表情やジェスチャー，間などのうち一部工夫が見られる	聞き手に伝わるような工夫は特にしていない

（やり取り）	A：３点	B：２点	C：１点
相手が聞きやすい表現の工夫	聞き手を見ながら,声の大きさや速さ,身振りを交えて工夫して話している	はっきりとした声で，相手に聞こえるように話している	ボソボソと下を向いて話し，相手に伝える意識が薄い

相手への関心の姿勢	相手の発話に応じて,質問や反応を工夫している	相手の話をしっかり聞き，うなずくなどの基本の反応をしている	質問や反応がほとんどない
やり取りの継続	相手とのやり取りを自分から続けようとしている	やり取りは続けられる	やり取りを続けることが難しい

相手意識をもっているかのパフォーマンスのA判定，B判定，C判定児童の割合は以下の通りとなった。

	A（８～９点）	B（５～７点）	C（４点以下）
実践①	66.7%	25　%	8.3%
実践②	66.7%	25　%	8.3%
実践③	71.4%	21.4%	7.2%
実践④	80%	20%	0%

3　結論

単元デザインを工夫し,学習環境を多様にしながら,学んだことについて視点をもって振り返らせることで,児童が目標に向かって，自分ごととして目的・課題を捉え，課題に向かって，自分に合った学習環境や方法を選んで主体的に取り組み，相手意識をもって，コミュニケーションを交わすことができるようになる。

4　研究の反省，今後の課題

（1）手立てについて

今回の取組では，①単元構成の工夫，②学習環境の設定，③振り返りカードの工夫の３つの手立てを講じた。研究主題「①目標に向かって，②主体的に学び，③表現する」児童の育成としては，論理的には，整合は取れているものの，次期学習指導要領の検討事項である「統合的な理解・総合的な発揮」「見方・考え方」「主体的に学習に取り組む態度」を意識した深い学びの具現に向けた手立ての工夫になっているのか整理が必要である。

今後は，実際の児童の姿と構想した研修主題とその手立てについてさらに分析し，今そしてこれから求められる授業づくりの方向性に合致しているかを検討していく。

（2）検証

検証１振り返りの量的検証では，児童による自己評価を中心に行った。

検証２相手意識の質的検証では，実際の児童の姿や変容を教師が見取り，価値付けた評価となっている。単元の前半にコミュニケーションを支える活動に十分な時間をかけて言語材料を習得させてから，児童に話す内容を思考させ，コミュニケーション活動を行ったことにより，児童から単元のゴールで誰に何を話してみたいかが出てきた。そのため，相手と話したいという意欲を高くもって発表に向けて主体的に学習に取り組む児童が多かった。また,自分が伝えたいことだけでなく,相手が興味関心をもちそうなことを思考して,話す内容を考えて取り組んでいた。発表ややり取りの中でも，先生と目を合わせながら質問をしたり，自分の考えを伝えたりしながら話していた。相手にあまり伝わっていないと感じるところがあったらもう一度ゆっくり伝えている様子も見られた。

（3）主題と手立てと検証

今回の実践は，コミュニケーション活動に重点を置いて検証を行った。コミュニケーション活動を充実させるためには，主体性だけでなく，コミュニケーションを支える活動の重要性を感じた。児童に多くの話法を定着させるためのコミュニケーションを支える活動をこれからも検証していきたい。

4　引用・参考文献

文部科学省　リーディングDXスクール事業特別講座「これからの授業！どうするの！」（2023.12.12）
中央教育審議会 教育課程企画特別部会（2026.9.25）
次期学習指導要領教育課程部会 外国語ワーキンググループ取りまとめ（案）（2026.8.3）